

『偽善者は不幸だ』

聖書 マタイによる福音書 23章 13~15節 賛美歌 497 521

説教 森田幸男牧師

マタイによる福音書 23章には、イエス・キリストの律法学者とファリサイ派に対する非難の言葉が記されております。そしてそれは非常に手厳しいものであります。

この律法学者たちとファリサイ派というのはどういう立場の人たちかということを考える時に、新約聖書の中にパウロという人の手紙がたくさんあるわけですが、このパウロという人は初代教会において広く世界伝道をなした伝道者であります。実はこの人がファリサイ派に属しておりました。そして彼は律法学者を志していた人物でありました。その彼が後に回心してクリスチャンになるわけですが、後にフィリピの教会に書き送った手紙が「フィリピの信徒への手紙」としてこの新約聖書の後ろの方にあります。その3章5節のところで、こういうふうに自己紹介をしています。「わたしはヘブライ人の中のヘブライ人、律法に関してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした。」このように、かつての自分を思い起こし、振り返ってこのように言っています。こういう自覚、或いは熱心さを持った人たちが律法学者、また、ファリサイ派と言われる人々であったわけです。律法学者の大方はファリサイ派に属していたのです。

この「ファリサイ派」という言い方は、「分離派」と言ったらいいでしょうか。他の人たちとは違うという自覚をあらわした名称であります。ですから今日のマタイによる福音書に戻りましても、23章15節を見ますと、「律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。改宗者を一人つくろうとして、海と陸を巡り歩くが、改宗者ができると、自分より倍も悪い地獄の子にしてしまうからだ」とこのようにありまして、この派の人々がどんなに伝道に熱心であったかということを窺わせます。「改宗者」というのはイスラエル人でない人でユダヤ教に改宗した人のことです。ですからユダヤ教の異邦人伝道ということになるのですが、「その改宗者一人をつくろうとして海と陸を巡り歩く」と、その熱心さをこういうふうにイエス様は言っておられるのです。

今申しましたパウロもこのファリサイ派に属してありまして、彼はクリスチャンになってからも、その伝道ということにおいては極めて熱心でありました。そういう熱心という点では、パウロはファリサイ派の熱心さを継承しているわけです。けれどもイエス様は、「そのように熱心に一人の改宗者を得ようとして励むけれども、一人の改宗者を得ると、

その人を自分よりも倍も悪い地獄の子にしてしまう。それは決して救いに導くのではないのだ」とこういうふうと言われるのです。13節でも、「律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。人々の前で天の国を閉ざすからだ。自分が入らないばかりか、入ろうとする人をも入らせない」と言われます。ファリサイ派、律法学者たちの自覚からすれば、自分たちこそ神の教えとしての律法を守るという点では非のうちどころのない者たちだとそういう誇りをもって、熱心の点では誰にも負けないという自覚を持っていたのですけれども、その彼らに対してキリストは、「あなたたち偽善者は不幸だ」と言われたのです。この「不幸」という言葉は以前の文語ですと、「わざわざなるかな」となっております。これは非常に激しい言葉で、悲嘆と憤り、そしてそれを越えて「断罪」を含んだ言葉が、この「不幸だ」という言葉なのです。それをイエス様はこの23章では七回も繰り返しておられて、この人たちを徹底的に断罪しているわけであります。

私たちはこのマタイによる福音書を今23章まで読んできたのですが、この正午礼拝で読み始めたのは第5章からでした。そして5章6章7章は「山上の説教」と呼ばれています。その「山上の説教」と今日の箇所は対照的な箇所です。というのは、5章の方を見ますと、イエス様は、「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである」とこのように言っておられます。ここは前の文語ですと、「幸いなるかな、心の貧しき者、天国はその人のものなり」となっていました。5章は「幸いなるかな」ですが、今日のところは、「わざわざなるかな」ということで、非常な対照をなしているわけです。

この「山上の説教」の7章をご覧ください。そこでイエス・キリストはこのように言っておられるのです。「人を裁くな。あなたがたも裁かれないようにするためである。あなたがたは、自分の裁く裁きで裁かれ、自分の量る秤で量り与えられる。あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか。兄弟に向って、『あなたの目からおが屑を取らせてください』と、どうして言えようか。自分の目に丸太があるではないか。偽善者よ、まず自分の目から丸太を取り除け。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からおが屑を取り除くことができる。」このようにおっしゃって、ここに「人を裁くな。あなたがたが人を裁くその裁きによって、自分も裁かれる」とイエス様は言っておられたのであります。

私たちの経験からしても、他人を批判するとその批判が必ず自分に返ってくるということを経験としても知っておりますから、人を厳しく裁くということは容易には出来ない。これは勇気のいることです。時に、人を遠慮会釈なく批判する人がいます。けれどもそのような人を見ていると、自分のことが分かっていないのではないかと思う、そういう人もあります。それこそイエス様が言っておられるように、「偽善者よ、まず自分の目から丸太を取り除け」であります。つまり丸太のような大きなもので目が塞がれているということです。それでいて、他人のおが屑のような欠点でも目ざとくあはだこうだと言うわけです。

が、「まず自分の目から丸太を取り除け。そうすればはっきり見えるようになって、兄弟の目からおが屑を取り除くことができる」とこういうふうに出ておられます。

しかし今日の箇所へ来ますと、「幸いなるかな」ではなく、「わざわざいなるかな」を連発されるわけです。そして手厳しく批判し、断罪しておられるのであります。そして今日の表現ですと、「あなたがたは天の国を閉ざす者だ。自分も入らないし、人も入らせない。そして熱心に伝道して、一人の改宗者を得て、あなたがたは地獄の子にする。」このように本当に厳しく断罪しておられるのであります。ですからここでは、天国なのか、それとも地獄なのか、そういうあれかこれかの究極の選択が迫られていると言ってよいと思います。このようなイエス様の言葉に触れるとき、私たちは自分自身の偽善性の徹底した自己吟味を迫られます。

今日の箇所の並行記事として、ルカによる福音書 11:37~52 があります。ここに今日の箇所と似たような内容が出ています。11 章 52 節から読みます。「『あなたたち律法の専門家は不幸だ。知識の鍵を取り上げ、自分が入らないばかりか、入ろうとする人々をも妨げできたからだ。』(先程のマタイによる福音書では<知識の鍵>というのは<天の国を閉ざす>とありました。本当の真理に至る鍵を取り上げてしまうと出ておられます。)イエスがそこを出て行かれると、律法学者やファリサイ派の人々は激しい敵意を抱き、いろいろの問題でイエスに質問を浴びせ始め、何か言葉じりをとらえようとねらっていた」とこういうふうに出てくるわけでありまして、

このように人を責めると必ず仕返しがあるわけですから、それは覚悟しなければなりません。ですから私たちはしばしば事をはっきりとさせないといけない時にも、そういう応酬を恐れるあまり、事柄を曖昧にして過ごすということがあります。しかしそのようにして、すべてを駄目にしてしまう。事柄を曖昧にすることによって、すべてを腐らせてしまう。そういうことがあるのであります。ですから私たちは今日のイエス様の言葉を聞いて本当に自己吟味を迫られます。そしてイエス様はこのように律法学者、ファリサイ派の人々を徹底的に非難、攻撃、断罪されるわけですから、イエス様が自分のことをよく知らない偽善者でないならば、自分自身の中に一点の曇りもない、そういう自覚を持って、天国か地獄か。あなたたちの言うことが真理であって、それによって救いに入るといふならば、わたしが間違っている。しかし、私の立場と私の教え、その生き方が正しいのであるならば、あなたがたが間違っているという、あれかこれかを、イエス様は迫っておられるのであります。彼らが熱心であることはイエス様も認めておられるのであります。そしてパウロの言葉を先ほど紹介しましたが、熱心の点では、教会の迫害者、自分たちの立場が正しいと信じるから、最初の教会はこのまま放置できない邪教集団というふうに出てくるので、徹底的に迫害するほど、熱心で激しかったのです。しかしそのようなあり方が間違っているということを、パウロはイエス・キリストに出会うことによって知りました。そし

て後にパウロは、「わたしは彼らファリサイ派の人たちが熱心に神に仕えていることを証しますが、この熱心さは正しい認識に基づくものではありません」と、このように振り返って言っています。

そういう点で、私たちは熱心であるということはそれなりの大事な要素ではありますが、熱心で、本当に命に至る道が何なのか。そしてあなたは今その道にありますか。それは本当に天の国に至りますか。それともそれは地獄に至る道ですか。そういうことを、今日のイエス様の言葉を通して、私たち各自が自己吟味を迫られると思います。

最後にイエス様の厳しい教会批判の言葉が、聖書の一番後ろにある「ヨハネの黙示録」にあります。その4章14節に、「ラオディキアにある教会にあてた手紙」というのがあって、これはキリストからラオディキアの教会宛ての手紙であります。そこを読んで終わりたいと思います。

「ラオディキアにある教会の天使にこう書き送れ。『アーメンである方、誠実で真実な証人、神に創造された万物の源である方が、次のように言われる。＜わたしはあなたの行いを知っている。あなたは、冷たくもなく熱くもない。むしろ、冷たいか熱いか、どちらかであってほしい。熱くも冷たくもなく、なまぬるいので、わたしはあなたを口から吐き出そうとしている。あなたは、『わたしは金持ちだ。満ち足りている。何一つ必要な物はない』と言っているが、自分が惨めな者、哀れな者、貧しい者、目の見えない者、裸の者であることが分かっていない。そこで、あなたに勧める。裕福になるように、火で精錬された金をわたしから買うがよい。裸の恥をさらさないように、身に着ける白い衣を買い、また、見えるようになるために、目に塗る薬を買うがよい。わたしは愛する者を皆、叱ったり、鍛えたりする。だから熱心に努めよ。悔い改めよ。見よ、私は戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう。勝利を得る者を、わたしは自分の座に共に座らせよう。わたしが勝利を得て、わたしの父と共にその玉座に着いたのと同じように。耳ある者は、“霊”が諸教会に告げることを聞くがよい。＞』」

お祈りいたします。

聖なる主イエス・キリストの父なる神様。

今、御言葉に照らされて、自らの歩みが正に熱くもなく冷たくもなく、なまぬるい、あなたが嫌気をもよおされるような自らであることを思い知らされ、懺悔いたします。

主よ、どうか常にあなたの御言葉の導きの中で自らを省みつつ、御心に適う歩みをなさせてください。

この祈り、主の御名を通し御前におささげいたします。アーメン